

豪放にして細密 : 岡村繁先生を追憶する

竹村, 則行
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1650636>

出版情報 : 中国文学論集. 44, pp.31-39, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

豪放にして細密——岡村繁先生を追憶する——

一 はじめに

岡村繁先生は、平成二十六年（二〇一四）十二月二十六日に九十二歳で永眠された。若年の学生時より還暦過ぎの今日に到るまで、四十余年の長きに渡ってご指導いただいた先生の思い出について、筆者は先に追悼の小文をご霊前に供したが（『東方学』一三〇輯、二〇一五年七月）、この度は先生が創刊された『中国文学論集』において追憶を重ねることにする。前稿との重複や個人の思い出を多く含むが、あらかじめ寛恕を請う。

二 岡村先生との出会い

先生に初めてお会いしたのは、昭和四十六年（一九七二）の学部二回生時であった。当時大学での勉強に悩み、一年間留年した二十歳の青二才が、やっと中国文学科への進学を希望し、岡村主任教授の面接となった。面接内容の記憶は薄いですが、岡村研究室や中国文学研究室の天井まで配架された夥しい書籍に圧倒され、留年で学問（らしきもの）に渴望していた貧窮学生は、ここで勉強できれば本望と心底救われた思いであった。当時先生は四十九歳、中国文学研究の全国的な声名はもとより、余燼冷めやらぬ学園紛争への機敏かつ精力的な対応で全学的に有名だった頃である。その後、筆者は幸いに岡村教授の指導を受け、九大の中国文学研究室を拠点として人生の過半の時間を過ごすことになる。周知のように、先生は学問の意思を示す者は、誰でも分け隔てなく温かく迎え入れてくださった。ある留學生が漏らした『千載一遇の機会』を、筆者も先生との出会いによって得た。筆者に限らず、先生との幸運な出会いに浴した者は、学内外、国内外を問わず多数に上るであろう。

三 講義・演習・雑談の思い出

九大時代の先生は早朝出勤であった。前夜遅くまで研究室に詰められても、先生は常に用務員よりも朝早く研究室に見えていた。当時の「漢代辞賦文学」講義は、先生があらかじめ用意した論文式の講義内容を教壇上で朗々と読み上げられ、受講生がそれを逐一忠実に筆記する口述形式であった。筆者はここで初めて揚雄や司馬相如の辞賦作品に接したが、無学の学部生には速記もどきの口述記録は容易ではなかった。単位認定は筆記ノートの提出で行われたため、期末には慌てて先輩のノートを借りて書き直した。聞けば先生は前夜遅く、また講義直前まで口述内容の準備をされていたという(後日調査に伺ったご自宅の書庫内で、この原本口述ノートの束を発見した)。また学生時の演習は『文選』であった。諸本の異同や李善注の解釈、故事出典の確認等で担当者は準備に一月以上を要し、毎回の進度は一二行であった。中国古典の解説に精読は必須だが、未熟な学生は悠遠な前途に嘆息の連続であった。演習時に行った疑問や解決の方法が、そのまま論文構想にも適用できることが分かったのはずつと後である。

この頃、先生は文学部長や図書館長等の要職を歴任され、とてもお忙しそうであったが、(むしろその故でもあろう)時間の合間によく研究室に来られ、雑談に興じられた。話柄に中文関係は却って少なく、ソ連のゴルバチョフや中国の鄧小平などがよく話題に上った。その頃福岡公演に來た現代革命京劇に話が及んだ時、先生は言下に「全くつまらん」と即答された。雑談は時に数時間に及び、気付くと窓外に薄闇が迫っていたことも再三であった。

当時、研究室では三月の九重九大山の家での温泉合宿研修が恒例であった。一同が寢食やトランプ、懇談を共にし、師生の距離が一気に縮まった。ある大雪の年、皆で雪中行進中、先生は突然降り積もった新雪の上に喜喜として勢いよくダイブされた。全国に知られた万歳三唱では確かに数十センチ「空中浮揚」した。身近には終始「喜喜交々」ならぬ「喜喜交々」の無邪気で愛嬌ある先生であった。「悲苦」を我々に見せられることは一切無かった。

四 中国文藝座談会について

先生は昭和四十一年(一九六六)十月、東北大学から九州大学へ転任された。翌年三月、目加田誠中国文学講座初代教授が定年で退職すると、昭和四十三年『東方学』一二四輯二十四頁に「四十一年」とするのは誤り、四十六歳で第二代

主任教授に就任する。以後、九大勤務二十年、続く久留米十一年（更に退職後十七年）の九州在住時代を通じて、先生が最も腐心されたのは、今日では普通であるが、「西南学派」として、確かな実証に基づく学術研究を定着させることであつた。戦後二十年余を経て、新生日本の中国学は確かに全国的に欧米由来の実証研究の道を進んではいたものの、往々にして、悲劇詩人屈原、隱遁詩人陶淵明等の如く、安易な印象批評に終始する皮相な「研究」もまだ根強かつた。九大に赴任された先生は、生涯を掛けて、全国に先駆けて実証的な学術研究を自ら実践され、全国レベルの中国文学研究の拠点形成に尽力された。その母体の一が中国文藝座談会であつた。

中国文藝座談会（初期は中国文学研究発表の会とも）の記録は一九五一年に遡る。この前後に新制九州大学（一九四九年）や東方学会（一九四七年）、日本中国学会（一九四九年）、九州中国学会（一九五三年）等が誕生しており、この研究会が戦後の全国的な新しい学問の機運から生まれたことが分かる。その名称は毛沢東の「延安文藝座談会での講話」（一九四二年）に由来する。当時は中国から引揚帰国した学生も多く、発表題目は現代文学が古典よりも多かつた。目加田主権の中国文藝座談会は一九六五年六月まで計九十二回の開催記録がある。その後、同年八月から第二次中国文藝座談会を改めて第一回から再開し、今日に到る（電子版『九州大学百年史』九州大学、二〇一四年。最新は二〇一五年十一月開催の第二八四回）。岡村先生は九大赴任後にこの会を熱心に主導されたが、当時の文化大革命の影響や先生の専門の関係もあり、発表内容はやがて中国古典文学が大勢を占めるようになった。

原則隔月土曜の午後に関われる座談会の雰囲気は至って和気藹々、かつ真摯真剣である。テーマは中国文学研究に相応しく、古典文学以外に近現代文学、音楽絵画書道等万般にわたる。教員も屢々学生院生等若い世代の新鮮な発表に啓発される。今日全国の機関等においてこの種の研究会は珍しくないが、中でも中国文藝座談会は歴史の長さで一貫したテーマにおいて際立った特徴を持つ。目加田先生が基盤を作り、岡村先生が敷いた軌道を着実に進みつつ、今後も静永教授を中心に西日本の確かな研究拠点としての中国文藝座談会の進展が期待される。

五 『中国文学論集』の編集

岡村先生が一九七〇年に創刊した『中国文学論集』は、本号で四十四号を数える。前身の『中国文藝座談会』

ト」(目加田代表。既刊一七冊)を一新し、時代の要請に応え得る學術誌を目指した本誌は、文字通り先生が一字一句手塩にかけて哺育された。例えば創刊号表紙の横排「中国文学論集」の題字は、先生が自ら創作されたレタリング文字である。論文内容の指導、編集時の厳格な校正等は言うまでもない。経費や旧字の関係から、途中八十一十八号を台湾で印刷した。当時先生は自ら台湾に念校に赴かれた。その後幸いに論文執筆や会員の継続的で熱心な協力を得て今日に至っている。「中国文学論集」は、九州大学中国文学会の機関誌として全国に数多くある同様の中国文学研究誌に比しても決して引けを取らず、号を重ねることに学界の重要度を増してきているように筆者は自負するが、客観的な評価は第三者また後世に委ねる。

九大(箱崎)における中国文学研究は、先に述べた口頭発表の中国文藝座談会、更にこの論文発表の『中国文学論集』を基幹とする。ひろく通常の研究室での研究、演習や講義、国内外の学会参加は固よりである。筆者は学生院生・教員時代を通じ、中国文学講座の一員として中国文藝座談会や『中国文学論集』の恩恵に浴し続けてきた。蘇軾が述べた廬山の真面目の喩えのように、筆者は愚かにも渦中にあつてこれらの研究組織の恩恵をさまで認識することは無かったが、退職した現在になって振り返れば、この二輪の研究組織が自分にとってどんなに重要な母体であつたか、今更ながら思い知る次第である。そして、この二つの揺るぎない研究組織を設定された岡村先生、また座談会・論集の継続発展に尽力協力を惜しまない現在の静永健代表及び全ての関係者に衷心から敬意を表する。

六 『白氏文集』 訳注

『白氏文集』 訳注(明治書院、新釈漢文大系)は先生畢生の大業である。先生はご逝去前夜も普段通り机に向かわれていたという。前夜に取り組まれた最後のお仕事が何であつたか今では知る由もないが、三ヶ月後、岡村文庫の調査のために、同志諸君と共に恐る恐る拝見したご自宅書齋の机上や周囲の書棚には、多数の『白氏文集』 訳注に関する参考書や校正ゲラが整然と並んでいた。『白氏文集』は文字通り先生のライフワークであつた。十二月十日刊行の生前最後の第十冊新刊本を、著者の訃報とともに受け取って驚いた方も多いであろう。未刊三冊についても先生の原稿執筆と校正が同時進行中であつたのであり(索引冊を除く)、まさに全巻完結直前の無念のご逝去であつた。

先生が単独で最初に『白氏文集』訳注を開始されたのは昭和五十年（一九七五）である。長年『文選』『文心雕龍』等の中国中世文学理論書の研究に邁進された先生が『白氏文集』に関わられた経緯について筆者は多くを知らないが、先生は『白氏文集』訳注を名誉あるライフワークと認識され、煩瑣な校務を遣り繰りして多くの時間をその作業に注入された。ただ『白氏文集』訳注にとって不幸なことに、中国文学研究者のみならず機関管理者としても有能で周囲の信頼が篤かった先生は、この前後に文学部長や図書館長の要職に忙殺され、『白氏文集』訳注に割ける時間はいよいよ少なくなっていた。加えて作業を続ける中で、当初想定しなかった新しい異本や参考書の出現、平易故に難解な俗語等の続出に悩まされた事情もあったであろう、それまでの単独執筆をやむなく断念し、次善策として案出されたのが、門弟が予め下書きした原稿に先生が批正を加える方法であった。この方法による最初の会合は一九八一年に持たれた。そして原稿提出→組版→数次の校正を経て、七年後の一九八八年に、ようやく第三冊が第一回配本となる。当初は原稿への直接訂正書き込みを企図したものが後には組版済みゲラへの朱字訂正に変更したこと、当初の原稿は全て手書きであったこと、時間の推移と共に原稿執筆担当者、参考書等が再三変更したこと等も今では懐かしく思い出される（拙稿「詩日記とともに辿った白居易の貶謫の道」、『白居易研究年報』十、二〇〇九年）。

入矢義高先生は、岡村先生が昭和三十七年（一九六二）に名古屋大で博士学位を取得された際の主任教授である。その入矢先生が昭和六十三年（一九八八）八月十日及び十五日付けで岡村先生に出された書簡のコピーが筆者の手許にある（原物は岡村文庫蔵）。七月二十五日刊行の『白氏文集』三（原稿担当は筆者）の誤読・不足箇所（多くは俗語解釈）を、細かく縷々八十五条に渡って詳細に指摘されている（改訂版に訂正済み）。『入矢義高先生追悼文集』（汲古書院、二〇〇〇年）に複数の高弟が異口同音に回顧されると全く同じく、その返信の迅速さ、指摘内容の正確さに、原因となった張本人の未熟原稿を柵に上げて驚かされる。以下、入矢書簡の一節を岡先生に無許可のまま引用する。

白氏の中年以降の詩は、私の見るところ、おのが思い入れをコッテリと言葉に造型することを極力避けていて、それだけに、一見平明に見える修辭の變に分け入ることは、想いのほかに容易ではありません。ウエイリ氏の訳に時々ハッとさせられることがあるのは、一つにはこの人の勝れた詩人的資質による感性の細やかさがあるためだろうと思います。

この後、入矢先生が逝去される一九九八年以前に順次お送りしたであろう『白氏文集』新刊本への入矢先生の反応について筆者は知らない。未刊四冊を残して岡村先生は永眠された。その後の岡村文庫調査や明治書院の説明で判明したが、その全てに渡り、先生自身の夥しい書き込みや校正が進行中であつた。

浅学の筆者はその長年の学恩とご指導に些かでも報いるべく、先生の承認がないまま未刊部の続補校正を申し出し、幸い二〇一五年九月に第十一冊が刊行された。続補の不備を恐れるが、原稿担当者の協力を得、残り二冊（更に索引）の刊行を期したい。読者は怪訝に思われるであろうが、著者の没後に著書が陸続刊行されるのは以上の事情による。

七 岡村文庫について

先生が生涯をかけて収集された図書は、遺命により、先生が十一年間教鞭を執られた久留米大に一括寄贈された。先生は平成四年（一九九二）の久大文学部創設に尽力されたが、岡村文庫はその文学部創立二十五周年を記念して開設される。同大には、既設の越智重明文庫（東洋史）と並んで、中国古典の双璧の研究資料が揃うことになる。

ご逝去三ヶ月後の三月下旬、筆者は岡村文庫の基礎調査の為に、静永教授・奥野助教を中心とする九大中文の諸君と共にご自宅を訪問した。玄関・応接室・書庫・書齋（一・二階）の五箇所到天井まで書架が組まれ、図書や原稿・文書等が整然と並んでいた。そこは精密な岡村世界であつた。生前の訪問時、筆者は玄関横の応接室に通されるのが常であり、書齋（一階・二階）や書庫は『東方学』一二四号の取材時に一度入室を許されたきりである。三・四月、久大への搬出前に、急遽蔵書調査と簡易目録作成が行われた。約七千点、二万冊に及ぶ蔵書文書の分類・番号振り、書誌入力、箱詰め等の作業に、十三名、延べ約九十時間を要した。七月末に三百箱超の段ボール箱を二トシ車二台に積み込み、搬出を無事完了した。以後は久大によって二年後の岡村文庫開設に向けて本格整理が行われる。

古今東西、人類の知的成長に寄与した図書は、個人・公的機関蔵を問わず、常に火・水・虫・無知の四大災禍によって容易に散逸し消滅する。本人の遺命と関係者の尽力によって一括伝存が可能になった岡村文庫には、故人が生涯に渡って蒐集した中国古典文学研究の資料二万冊が集積されており、昭和―平成期の篤実な学者の蔵書の実態を知ることができる。ともあれ、散逸を免れた岡村蔵書が後世の研究者に活用されることは喜ばしい限りである。

追悼 岡村 繁先生



岡村先生宅応接間 2015年3月撮影

八 その他の思い出

ここでは、備忘を兼ね、先生のその他の個人的な思い出を追懐したい。

先生の九大在任時、年頭一月三日に門弟が東区青葉のご自宅に集合し、和服姿の先生を囲んで年始宴を開くのが恒例であった。屠蘇酒をいただき、研究室での暢談に輪をかけて、世評・人評に花が咲いた（辛辣なコメント＝悪口の方が多かった）。近隣の田舎出身の筆者はよく生家への帰省を切り上げてこの宴会に参加したが、生家のそれに比べて格段上の高級なお正月料理を堪能した記憶が今も舌先に鮮明に残る。

初期の拙稿や『白氏文集』三、四の担当原稿は、先生の端正な朱字が夥しく施され、真っ赤になって返却された。より適切な表現や贅言の削除などは筆者自身の論文執筆時の指標となった。その後筆者が教員として院生の論文を査読する際も先生の指導法が常に脳裏にあったが、浅学の哀しさ、先生の指導の深さ綿密さには遠く及ばなかった。筆者の卒論題目は『王国維試論——その詩人としての憂鬱——』であった。題目決定の相談時に、先生はやっぱり『王国維研究』の主題目を提示されたが、生意気な青二才は原題を固持した。四十余年を経た今見れば、言うまでもなく『王国維研究』題が断然相応しい。

最後に、平成十一年己卯、ウサギ年に頂戴した先生の賀状の名文を、故人に無断で引用する。

それでも やっぱり わたしは カメより ウサギに なりたい

九 まとめ——豪放にして細密

先生は、コンピューター制御のブルドーザーの如く、論著執筆も内外の諸活動も豪放にして細密であった。精悍な体躯と精密な活動は、当時の中国指導者をもじって「九大の鄧小平」と渾名されたが、本人も満更でもなさそうであった。その研究者・管理者としての活動は全く疲れを知らず、よく「睡眠は三時間あれば十分」と言われた。

「人文研究は主観の客観化である」とされるが、先生も「まず対象作品を先見なしにじっくり読み込み、そこで自分なりに認識し得たことを信じつつ、あとは資料に拠って細心且つ大胆に展開する」趣旨のことを屢々口にされた。

世間の旧来の常識に安易に寄り掛かることなく、自分の率直な主観直感を大切にされた。今日の学界では客観資料に基づく論述の展開は当然の事であるが、先生が若手研究者として頭角を現わし始めた昭和三十四年当時は必ずしもそうではなかったと思われる。その頃少年だった筆者には実感が無いが、明治・清朝以来の重厚な漢学の伝統の前に、世間の常識や権威を尊崇しない（ばかりか、反逆するように見える）若手研究者の論文は、正当な評価を受ける前に異端視され、且つ胡散臭く映ったのではないか。『東方学』百二十四輯の座談会（一二三頁）に回顧される、屈原研究が当初受けた批判はその好例であろう。とすれば、先生を自らの後任に招かれた目加田先生は慧眼である。

「先生の緻密な論述の展開法は、専攻された六朝駢儷文の影響があるのでしょうか」、あるとき生意気にも質問した筆者に、先生は否定されず、温顔を返された。また、豪放大胆な発想については、先生の生地が大きく関わるであろう。誇張もあるが、先生は滋賀の生地について「私の田舎は文化のブの字もないような山奥でした」と回顧された（『東方学』一二四輯、一〇八頁）。古今東西を問わず、文化また経済の恩恵に乏しい田舎出身者が最終的に頼れるのは「裸一貫」、自己の脳力・体力のみである。非礼を覚悟で推測すれば、他人には豪放細密と見られる先生の論文は「滋賀県というところは、有名な近江商人の発祥の地ですね。それで私も、（略）、将来あわよくば巨万の富を築きたいと思っていました」と述懐される。長年中国古典文学研究に邁進され、『岡村繁全集』『白氏文集訳注』その他巨大な研究成果を挙げられた先生は、学界に十分に「巨万の学益」をもたらしたと筆者は考える。

竹 村 則 行